慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『フィーメイル・アメリカン』の空間表象と環大西洋的修辞学
Sub Title	Expressions of geographical space and transatlantic rhetoric in The female American
Author	原田, 範行(Harada, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.33- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『フィーメイル・アメリカン』の空間表象と環大西洋的修辞学

原田　範行

1.『フィーメイル・アメリカン』の謎

『フィーメイル・アメリカン、もしくはアンカ・イライザ・ウィンクフィールドの冒険』（*The Female American; or, The Adventures of Unca Eliza Winkfield*）は謎めいた小説である。1767年、ロンドンで刊行された。作者は、おそらく筆名と思われるアンカ・イライザ・ウィンクフィールド（Unca Eliza Winkfield）。ウィンクフィールドによる一人称の語りを中心とした自伝的作品だが、このウィンクフィールドについては、生没年を含め、今日に至るまでその伝記的詳細はほとんど分かっていない。[1] 作品の冒頭、アンカの祖父としてエドワード・マライア・ウィンクフィールド（Edward Maria Winkfield）なる人物が登場するが、おそらくは彼が、アメリカのヴァージニア植民地の初代総督として実在のエドワード・マライア・ウィングフィールド（Edward Maria Wingfield、1550-1631）であって、アンカは彼の架空の孫娘という設定ではないかという推測がいちおう成り立つくらいである。

船が難破して未知の島にたどり着き、主人公が、様々な困難を克服して新たな生活を築くという展開から、この作品は従来、ロビンソナード（『ロビンソン・クルーソー』的物語群）の一つとされてきた。娯楽読み物を多く手掛けたジョン・ノーブル（John Noble、?-1798）のサーキュレイティング・ライブラリーを版元とし、初版以降も一定の読者を得ていたことは確かであろう。[2] 1800年には、マサチューセッツ州ニューベリーポートで、タイトルをわずかに変更したアメリカ版が出版されている。もっとも、初版当時のロンドンの批評界における評価

は芳しくなかった。「二流の『ロビンソン・クルーソー』」（『マンスリー・レヴュー』）、「イングランドではなくアメリカで刊行されていればよかったのに」（『クリティカル・レヴュー』）といった調子である。[3] もちろんアメリカの文芸誌での評価など望むべくもなかった。

作品のストーリー展開にも、謎めいた部分が少なくない。先に述べた通り、従来は一般に、ロビンソナードの一作品と見なされてきたが、実はもう少し複雑である。主人公アンカの祖父に実在のウィングフィールドを想定するとして、その息子、つまりアンカの父のウィリアムになると、想定される実在の人物は見当たらない。作品の展開に従えば、祖父は、現地人の暴動に巻き込まれて殺害され、父も捕虜として捉えられ処刑されそうになるのだが、そこを現地の王の娘に助けられ、彼女と正式に結婚して生まれたのがヒロインのアンカということになっているから、これは言うまでもなく、ポカホンタス（Pocahontas、c. 1595-1617）によるジョン・スミス（1580-1631）救出の顛末と重なっている。アンカは、いわばポカホンタスの娘という設定である。イギリス人の両親のもとに生まれたロビンソン・クルーソーとは、性別も出自も異なるし、アンカは、イギリスで教育を受けた後、大西洋を往還している際に船長の脅迫を受け、それを斥けたがために無人島に漂着して、そこから新たな人生を切り拓いていくのだから、作品の舞台は、そのタイトルにもかかわらず、アメリカというわけでもない。[4]『フィーメイル・アメリカン』におけるアメリカは、むしろ何らかの記号として機能していたと考えるのが適切であろう。独立戦争前夜にあった初版刊行当時のアメリカの状況が、この作品に描かれるアンカ誕生前後のアメリカとはかけ離れたものであったことは言うまでもない。

アンカの人生行路も、ほぼ単独で20年以上の無人島暮らしをするクルーソーとは大いに異なっている。そもそも、父母の戒めを聞かずに船乗りとしてイギリスを飛び出し、その結果として無人島暮らしに陥ったクルーソーに対して、アンカは、イギリスでもアメリカでも、周囲と衝突するどころか、周囲からの賞賛を集めてさえいる。彼女の無人島暮らしが始まるのは、父の死後、アメリカからイギリスへ向かう船の船長が、その息子との結婚を無理に迫ったことによる。強引なのは主人公ではなく、その周囲のほうである。しかも、アンカの一人暮らしは長くは続かない。作品の後半は、アンカの漂着した島を訪れる現地人をキリスト教に改宗していく過程を描いたものであるから、『ロビンソン・クルーソー』と

は違って、異教世界への布教の実践を描いた一種の手引書、とさえ言えるだろう。

たんにロビンソナードとみなすにはいささか無理のある『フィーメイル・アメリカン』の、こうした謎めいた要素を分析しつつ、本作品の持つ特質を改めて文学史的に整理してみようというのが本稿の目的である。

2.『ハイイ・イブン・ヤクザーン』の系譜と平和的改宗

『フィーメイル・アメリカン』のような小説が、詳細の分からない、おそらくはイギリスの女性作家によって描かれ、一定の読者を持ち得たのはなぜなのか。この問いに対する一つの解答として今日注目されているのが、イブン・トゥファイル（Ibn Tufail、c. 1105-1185; Tufall、Tufayle、Tophailなど異綴が多い）というスペインのアンダルシアに生まれたイスラム教徒の哲学者によって12世紀にアラビア語で書かれた寓意的物語『ハイイ・イブン・ヤクザーン』（*Hayy ibn Yaqzan*、ラテン語では*Philosophus Autodidactus*、英語では*The Improvement of Human Reason: Exhibited in the Life of Hai Ebn Yokdhan*などと翻訳された）の影響である。[5] インド南方と推定される赤道直下の島でたった一人、羚羊によって育てられたハイイは、質素な生活を送りつつも、自然に関する知識を豊かに蓄え、占星術などにも通じるようになる。30歳にしてはじめて島を訪れた人間に会い、その後、島を訪れる人々に、彼が修めた学問や信仰を教えてこれを啓蒙・教化する、という話である。

実はこの作品が、イギリスの聖書学者にして東洋学者であったエドワード・ポコック（Edward Pococke、1604-91）によってはじめてラテン語に翻訳されて刊行されたのが1671年、またスコットランドのクウェーカー教徒の宣教師ジョージ・キース（George Keith、1638/39-1716）による英訳が刊行されたのが1674年で、それ以降、一定数の読者を得たことが知られている。[6] 探検航海の記録が多く出版された17世紀後半から18世紀にかけてのイギリスにあって、各地の土俗的信仰が紹介され、それらとともに、”Autodidactus”、すなわち独学者の姿が、無人島暮らしを続ける現地人の、あるいは無人島に漂着してしまったヨーロッパ人の表象として広がっていったことは十分に想像できよう。

もちろんそればかりではない。ハイイの物語は、例えば、やはりスコットラ

ンドのクウェーカー教徒であったロバート・バークレイ（Robert Barclay、1648-90）の『真正なるキリスト教の擁護』（*An Apology for the True Christian Divinity*、1678）などを経て、異教を信じる現地人を平和的に啓蒙し、キリスト教へ改宗させる具体的なモデルともなっていった。つまり、無人島に漂着したキリスト教徒が、あたかも学問と信仰の深奥を極めたハイイのごとく、島の周辺の人々を啓蒙・教化していくという展開である。『フィーメイル・アメリカン』の特に後半部が、そうした系譜を受け継ぐものであることは明らかであろう。実際アンカは、現地の住人を引き連れてやってきた高僧と次のようなやり取りをする。

> *高僧*：「太陽以外の神とは何者でありましょうか？」
>
> *アンカの答え*：「過去から現在、そして未来にわたって常に存在しておられるお方です。」
>
> *高僧*：「その神はどちらにお住まいですか？」
>
> *アンカの答え*：「天上におられますが、しかし神はあらゆるところに姿を現します。自らの存在によって、天上も地上も満たしておられるからです。――神はすべてのものをご覧になり、すべてのものを知っておいでです。神はすべてのものをお造りになり、その無限の力で、すべてのものを助けてくださいます。」[7]

独力で事に処す、という限りにおいて、無人島に漂着したアンカの姿は、たしかにクルーソーと重なり合う。だが、クルーソーの独力は、食用の動植物を自らの生存のために採集・捕獲し、無人島を自分の島へと転換していくことに使われるのに対して、アンカの独力は、太陽を神として崇拝する現地人が、その信仰の聖地として訪れる島の動植物と共存し、その現状を維持しつつ、人々を平和的に改宗させることに向けられている。雌ヤギと子ヤギを見つけたクルーソーが、直ちに雌ヤギを殺して子ヤギを飼育用に捕獲するのに対して、アンカは、眠っている雌ヤギを見つけてもこれを殺そうとはせず、「ゆっくりと雌ヤギに近づき、乳を搾った」のであり、雌ヤギも「喜んで」そうさせてくれたのであった。[8]

もちろん『ロビンソン・クルーソー』にも、クルーソーがフライデーを改宗させる有名な場面があるが、それがこの作品の主眼であったとは言えまい。クルーソーを通してデフォーが追求したのは、近代社会を生きる個人の世俗化した側面

である。実際、キリスト教に改宗したフライデーは、『ロビンソン・クルーソー』の続編（*The Farther Adventures of Robinson Crusoe*、1719）の早い段階で戦死してしまう。これに対して、『フィーメイル・アメリカン』のアンカは、同じように無人島に漂着しつつも、むしろ『ハイイ・イブン・ヤクザーン』の主人公ハイイに見られる独学者の系譜を引き、その啓蒙・教化の姿が、特にクウェーカー教徒の文脈で環大西洋的に描き出されたものと解釈することが、いちおう可能であろう。

3. 空間表象の変容と環大西洋的修辞学

ただ、この『フィーメイル・アメリカン』を一種の説教文学と位置づけるにはやはり無理がある。作品前半部、アンカの同名の母がその姉のアルーカの指示を受けた刺客に襲われるまでの経緯は、いわば恋の三角関係の物語であるし、島に漂着したアンカが隠者の写本を見つけ、島の寺院に出かけて巨大な彫像の周囲を探索する過程は、スリリングなゴシック小説の一コマと言ってもよいだろう。作品後半部に登場するショア船長の物語も、およそ啓蒙・教化とは異なる世俗的な人生模様を扱っている。そもそもアンカによる現地人の啓蒙・教化と言っても、説教者としてのアンカの才覚よりはむしろ、改宗に至る現地人の平和的姿勢とキリスト教理解の優秀さの方が際立っている。

あるいはまた父方の従兄と結婚するアンカに、独立戦争前夜のアメリカとイギリスとの融和にかかわるメッセージを読み取ることも不可能ではないかも知れない。[9] ただ、そうするためには、イギリスで教育を受け、ラテン語もギリシャ語も修めたアンカの生い立ちと知性には、やや違和感がある。しかも、二人が現地人とともに永住することにした島は、イギリスとアメリカの中間に位置する大西洋上の島なのであって、この結論を重視するとすれば、それは英米両国の否定・止揚ということにさえなる。本稿冒頭で述べたように、この作品が謎めいているのは、作者がはっきりしないことや『ロビンソン・クルーソー』的であるか否かを含めて、多くの要素が、一つ一つは興味深いものの、ホッチポッチ的に混然一体となっている点にあると言ってよいであろう。初版当時の批評家が困惑した理由も、この統一感の欠如にあると見てよい。

しかしながらこのことは、逆に、この作品が、いささか不完全ではあるもの

の、多くの文学的主題を包摂し得ていることを意味しているとも言える。そしてここで重要なのは、そうした諸種の主題を包摂する器として、本作品の環大西洋的舞台設定が、きわめて重要な役割を果たしているのではないかと考えられる点だ。

既に述べた通り、この作品の場面は、英米両国とアンカが漂着した無人島、および現地人が住む近隣の島を、たびたび往還する。アンカが夫とともに現地人と暮らすことになるのは、この往還を経た後の、一種の妥当な判断によるものであって、嵐に遭って船が難破し、無人島暮らしを強いられ、しかも最終的にはイギリスに帰国するクルーソーの生き方とは決定的に異なっている。アンカは、行って帰る、のではなく、行ったり来たりしながら成長し、適切な生活の場所を見出すのである。この往還に、大西洋交流が活発になっていた18世紀後半の現実的交通事情が反映していることは言うまでもあるまい。ポカホンタス当時の英米の交流が、少なからず一方向的であるのに対して、『フィーメイル・アメリカン』のアンカは、大西洋を往還し、往還することによって作品を成立させているのである。

この往還は、しかし、たんに大西洋の両岸の接触が身近で日常的になった、ということだけを意味するものではない。身近で日常的になればなるほど、そのすぐ傍にある非日常が前景化してくるからだ。実際、無人島にたどり着いたアンカの絶望は、クルーソーのように長く深刻なものではなく、すぐに「好奇心」(curiosity)へと変わり、そしてこの「好奇心」が、写本や隠者の発見から寺院や彫像、洞窟の探検へと、新たな非日常世界の発見へとつながって行くのである。[10] 彫像の中に入って現地の高僧とやり取りをする彼女のいささかコミカルな姿には、非日常的行為の描写を支える日常的な安定が確かにある。だからこの後、夫となる従兄やショア船長が島に登場するという、やや唐突なストーリー展開も、あり得ることとして十分に受け入れられるのである。

ある程度身近な空間移動を伴いつつ、そこに非日常が現出する ── それは、いわゆるゴシック小説の典型的なストーリー展開の一つでもある。アン・ラドクリフ(Ann Radcliffe)は、『ユードルフォの怪奇』(*The Mysteries of Udolpho*、1794)においてフランスやイタリア、地中海に材を得た。『フィーメイル・アメリカン』の作者は、これに対して、探検航海の記録や漂流者の物語の系譜を意識しつつ、往還によってある程度日常化しつつある環大西洋という空間に宿る新た

な非日常へと眼を転じた。この非日常は、恐怖や深層心理に沈潜して行くゴシック小説型のストーリー展開を求めるものではなく、むしろ、平和的改宗の理想の実現やコスモポリタン的発想の具体化を促すことさえある、開かれた方向性を志向するものであった。開かれているからこそ、いささか未分化で、ストーリー展開も一点に収斂しないのだが、そこには確かに、いわゆるゴシック小説的空間表象を超えた表現世界が広がっている。それは、きわめて多くの探検航海者の記録や漂流者の物語を受け継ぎつつ、これを新たな、往還可能な空間の表象へと転換して行くほとんど最初の試みでもあったと言えるのではあるまいか。ロンドンで刊行された作者不詳の『フィーメイル・アメリカン』という作品におけるアメリカは、そのような試みを示す記号であったのではないかと考えられるのである。

註

1 本稿では『フィーメイル・アメリカン』と略記する。この作品のように、今日に至ってもなお作者不詳であるのは珍しいが、18世紀当時にあっては、旅行記の作者名が広く知られるということはあまりなかった。注2で示すように、デフォーの諸作品でさえも、作者不詳のまま流通していたものが少なくない。Furbank and Owen の特に301-02を参照。

2 フランシス・ノーブル（Francis Noble、?-1792）とジョンのノーブル兄弟は、サーキュレイティング・ライブラリーを通じて小説読者の拡大をはかったが、その際、デフォーを看板作家とし、その諸作品の作者を同定したことで知られる。Furbank and Owen の特に304-05を参照。

3 『フィーメイル・アメリカン』への初版当時の書評は、この2点のみである。Burnham and Freitas の特に9-11を参照。

4 厳密に言えば、クルーソーの父はブレーメン出身の「外国人」であるが、ヨーク近くの港町ハルで交易に従事し財をなしたとされているので、アンカの出自とは大きく異なる。

5 『ハイイ・イブン・ヤクザーン』からの影響については、Burnham and Freitas の特に14-16、Reilly の特に268-78を参照。

6 キースの1674年の英訳に続き、ジョージ・アシュウェル（George Ashwell）、サイモン・オクリー（Simon Ockley）がそれぞれ1686年、1708年に英訳書を刊行している。

7 引用は *The Female American* 101より拙訳による。ただし、このやり取りの後、アン

カは、「あなたは何者でありましょうか？」という高僧の問いにしばし戸惑い、「それをお尋ねになってはいけません。私は、適切と思われる質問以外には答えません」と苦し紛れに答え、それが逆に、現地人の改宗に役立って行くことになる。ここに見られる説教の破綻と偶発的問題解決は、後述するように、この作品の、説教文学とは異なる近代小説的世俗性を示していると言えよう。

8 引用は*The Female American* 75より拙訳による。ただアンカは、この直前の箇所では雄ヤギを四苦八苦して殺してもいるので、正確には、動物殺害を意に介さないクルーソーと、それを逡巡し生かそうとするアンカ、という対比と言えよう。Defoe, *Robinson Crusoe* 103も参照。

9 Simonの特に655-58を参照。

10 『フィーメイル・アメリカン』における「好奇心」への言及はきわめて多く、アンカの行動原理は、信仰というよりも「好奇心」にあったとも言える。特に彼女が彫像の周囲および内部を探索する第8章には、この「好奇心」が頻出している。

引用および参考文献

Anonymous [Unca Eliza Winkfield]. *The Female American; or, The Adventures of Unca Eliza Winkfield*. Second Edition. Eds. Michelle Burnham and James Freitas. Peterborough, Ontario: Broadview, 2014.

The British Library. Main Catalogue (http://bl.uk/).

Burnham, Michelle and James Freitas. Introduction. *The Female American; or, The Adventures of Unca Eliza Winkfield*. Second Edition. 9-32.

Defoe, Daniel. *The Farther Adventures of Robinson Crusoe*. The Novels of Daniel Defoe 2. Eds. W. R. Owen, P. N. Furbank, G. A. Starr and N. H. Keeble. London: Routledge, 2016.

---. *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe*. The Novels of Daniel Defoe 1. Eds. W. R. Owen, P. N. Furbank, G. A. Starr and N. H. Keeble. London: Routledge, 2016.

Furbank, P. N. and W. R. Owens. "Defoe and Francis Noble." *Eighteenth-Century Fiction* 4.2 (1992): 301-14.

Ibn Tufail, Abu Bakh Muhammad. *The Legend of Hayy Ibn Yaqzan*. Trans. Simon Ockley. New introduction by James Cowan. N.P.: Azafran Books, 2018.

Raven, James. "The Noble Brothers and Popular Publishing, 1737-89." *The Library* (6th series) 12 (1990): 291-345.

Reilly, Matthew. "'No eye has seen, or ear heard': Arabic Sources for Quaker Subjectivity in Unca Eliza Winkfield's *The Female American*." *Eighteenth-Century Studies* 44.2 (Winter 2011): 261-83.

Simon, Edward. "Unca Eliza Winkfield and the Fantasy of Non-Colonial Conversion in *The Female American*." *Women's Studies* 45 (2016): 649-59.